2017-01-12 資料―感想とコメント

1. ナショナリズム論の講義を受けて、ナチス・ヒトラー体制下のドイツを中心に見てきた中で、その体制を裁くことになった戦後の裁判に興味を持った。そして同じように戦時の独裁体制を裁いた東京裁判にも興味を持った。どちらも戦後の国際体制が、戦時下の体制を裁くという重要な裁判だと思うが、日本ではあまり東京裁判について語られることがない[1]と感じるので、そのあたりを考慮したいと思う。
2. 永岑先生がどのように今のホロコースト研究を行うようになったのかを知ることができ、高度成長や大学紛争など当時の環境や出来事がきっかけになっているのだと、とても勉強になりました。私自身も、どうしてホロコーストに興味を持つようになったのか、もう一度見直してみようと思いました。
   また、研究業績の中で（p。２０）、高校講座でホロコーストのお話をされたと記載してありましたが、私も教職に興味があり、他の授業でアンネの日記などを取り上げて、ホロコーストに触れてもらえるような指導案を作りました。どのように追浜高校でお奈々視されたのか[2]気になりました。
3. 前半に先生の研究や関連することをお話ししている中で、今まで自分はホロコーストを思想的・心情的事象として捉えていたなと思った。実際のところ、占領地の経済であったり、産業との提携もあり、現在でも有名な企業がナチスに手を貸していたという事実もあり、物事は多面的にとらえるべきだな[3]と改めて思い、期末レポートでも、それが意識できたらよいなと思いました。
4. 同じ講義を受講した人の、自分とは異なる関心のポイントに、また興味を持ちました。経済、人物、ナチ体制前のドイツ社会、裁判、反ナチスなど、いずれも気になるものでした。自分自身のテーマに関しては、興味があり、知りたいことが多く、絞ることが厳しいのですが、最終的に、欧州各国の（イギリス、フランス、ドイツに限る）移民、ナショナリズムの問題[4]に対する方向性を明らかにしたいと考えています。そのために、現在のニュースは勿論、過去に各国が歩んだ移民受け入れの歴史を明らかにしたいと考

---

[1] 日本の右翼（最近問題になったところでは防衛大臣の稲田氏の発言）は、「東京裁判は問題だ」と裁判の正当性を否定する言動を続けてきました。なぜ日本は敗戦国となったのか、なぜポツダム宣言を受け入れ、戦犯裁判を受け入れざるを得なくなったのか、根本的に考えてみる必要があります。ニュルンベルク裁判と東京裁判に関する文献・資料はたくさんありますので、しっかり検討を進めてほしいですね。

[2] 研究室 HP（古い研究室 HP です）にどんな話をしたか、レジュメを掲載しています。
http://eba-www.yokohama-cu.ac.jp/~kogiseminagamine/GakumonShokaiShigaku-Kokokoza.htm

[3] まさに、その点こそ、私の強調したいところです。

[4] これはまさに、イギリスの EU 離脱問題、フランスの極右政党・国民戦線の躍進、ドイツの極右政党「ドイツのための選択」などに共通する問題群と関わり、ホットな問題ですね。そして、深める可能性のある問題群ですね。

えています。この研究を通して、自分の卒論研究も深められると良いと考えています。

5. ナチス一つ調べるのにも、さまざまな視点から研究を進めることができ、農業について、工業について、などから、ドイツにおける謝愛状況・政治体制など見ることができるのだなあと思った。そういった意味で、国民戦線やフランスにおけるナショナリズムも、いろんな視点で[5]考えて行けたらと思った。
6. 発表を聞いて、ナショナリズムの問題の多様性を実感しました。自分は思想研究をやっているので、その方向で調べることにしましたが、本当に色々な角度から問題提起できると思いました。
7. 今回の授業は、自分が気付かなかった着眼点が見えてきたので、それをレポートに生かしたいと思った。

   純粋な疑問なんですが、先生は中国生まれということで、何か困ったことはあるのでしょうか？[6]また、それは現代の移民問題にも通じるところがある[7]とお考え得でしょうか？
8. 他の人の期末レポートのテーマを聞いて、どれも面白いと思った。私は、血統について深めたいと思っているが、血統に関しても、さまざまな背景や問題、いろいろな立場の人がいて、幅広く他の問題ともかかわりを持つことになると思う。できるだけテーマを絞って、明快にしたい部分を研究の中で掘り下げていきたい。中間報告に向け、資料集めに頑張ります！[8]。
9. 最初に先生が退職記念号で列挙した研究をしていくにあたってお話[9]をされていましたが、そこで気になる点が 2 点あったのでお聞きしたいです。1 つ目は、ナショナリズム

---

[5] どこから切り込んでいくか、焦点を絞っていくか、多様な道がありますね。

[6] 私は、何も困った経験はありません。両親の苦労は、かなりのものだったと思われますが、幸いにも、中国の奥深くではなく、天津に移ることができ、そこから帰国船で４６年３月には帰国できましたから、満州などからの避難民・引揚者の苦労とはけって的に違ていたでしょう。中国大陸、とりわけその東北部・満州に住んでいたたくさんの日本人、それに朝鮮半島に移住してひた人々は、悲惨な目にあいました。『大地の子』で描かれたような親子の別れ、中国人家庭への養子での苦労など、日本に帰国せざるを得なくなった多くの人の苦労には計り知れないものがあります。

[7] 戦争の結果、敗戦国の人々が、現地を去らなけらばならなくなる事態、しかも、戦後の混乱期・食料その他の決定的不測の時代に移動しなければならない事態、これは、最近のシリア難民なども苦境と重なり合うところがあります。シリアの場合、内線により、反政府派の多くの人々が追放され、難民化し、逃亡しているわけで、それがヨーロッパに移動しようとして、この何年間か、ヨーロッパに「反移民」の大きな流れを作り出してしまっています。

   戦後の私たちのような難民は、引揚者であり、日本に故郷があったわけで、その点では、何の縁故もない異国に移住しようとするシリア難民などとは、違いますね。

[8] 頑張って！！民族主義と血統の問題は、かかわりが深いですね。

[9] 2011 年の 1 月の最終講義の内容と研究教育の業績リストですね。なぜ、このような露文ないし著書を書いてきたか、何に興味をもって、何がきっかけで、といったことを話しました。

論に関係するか自信はないのですが、「大学紛争」を実際に経験した方のお話を聞ける機会がないので、具体的にどのような内容で、なぜ起こり、先生は何を体験したのか[10]、お聞きしたいです。

そして2つ目に、ヒトラーがユダヤ人を絶滅さえ用途考察していた時期についての研究はを専制はされていますが、その研究方法（調査方法）、どうして今まで言われてき

---

[10] 私の体験した「大学紛争」（「大学闘争」）は、1968年のことです。東大の大学院に進学したのが4月、その2か月後、6月17日の朝、大学に出かけてみると、校内騒然、「機動隊導入」、それに反対するさまざまの団体の集会と学内デモで、激しい興奮状態のキャンパスでした。大学における問題は、大学の自治により解決する、機動隊というような武力を持った権力機関が大学の問題に介入し、学生を逮捕連行するなどということは、あってはならない、という大学自治の原則が、破られた、ということが全国的に大学紛争・大学闘争が急速に広がる根本にありました。

しかし、それは日本だけのことではなく、実は、大きな学生紛争・闘争は、フランス、ドイツ、アメリカなど諸外国でも起きてきたことで、ある意味ではそうした世界の学生運動・学生反乱・学生闘争が日本にも波及したということです。

1945年に第二次世界大戦が終わり、その後20年ほどの間に、実は、大きな世界的転換がありました。かつて「自由」、「民主主義」、「反ファシズム」の旗を掲げて世界の先頭に立ったアメリカが、ベトナムの民族独立運動・闘争に介入し、ベトナム戦争が泥沼化していました。アメリカ自身、建国は、大英帝国に対するどクリス戦争で成し遂げたのですが、そのアメリカが、ベトナムの独立闘争・戦争（フランス植民地でした、そのあと日本占領下にあり、さらに日本敗北後、再度フランスが支配に乗り出しましたが、そのフランスに対する独立戦争で、フランスを助け、フランスに代わってベトナムに介入したのがアメリカでした）で、民族独立戦争を巨大な武力で鎮圧しようとしている、そのことに世界の若者が抗議し、ベトナム反戦運動が世界的に広がりました。兵隊にとられるアメリカの若者が、このベトナム反戦では大きな役割を果たしました。

それがフランス（パリ）、ドイツ（ベルリン）などにも飛び火し、フランスでは学生が、パリ大学（パリ第一大学のソルボンヌ大学）のあるカルチェ・ラタン地区を占拠する運動となりました。この占拠運動も警察の武力により排除がなされます。

そうこうするうち、8月には、今度は、第二次大戦のもう一つの勝利者・ソ連が、東ドイツやポーランドなどのワルシャワ条約機構の5か国を率いて、チェコスロヴァキアに進駐し、チェコスロヴァキアで「プラハの春」と称される「人間の顔をした社会主義」を求めいる自由で民主主義的な社会主義の動きを、戦車の力で鎮圧するという事件が発生しました。

東西冷戦のどちらの大国も、すなわちアメリカもソ連も、弱小諸国の鎮圧者になってしまった、という事態です。

こうしたなかで、大学のシステムも、大学では官僚や会社のリーダーなどを養成し、学問が、社会の支配構造の中で、支配者の側の学問をやる場所になっているのではないか、その大学のシステムは権威主義的で、民主主義的ではないのではないか、といった疑問が噴出しました。

これが、ベビーブーマー（戦後、平和のおかげで、たくさんの子供が生まれた）の進学とともに、それを受け入れる大学が十分な受け入れ態勢がなく、「マスプロ教育」が往古言うする状況で、学生たちの不満・怒りを蓄積させていました。

なにかの事件が火をつければ、それが瞬く間に広がる状況が、日本において、そして、アメリカ、フランス、ドイツにおいて、たまりにたまっていたのです。

た時期に疑問を持ったのか[11]などを詳しくお聞きしたいです。

---

[11] これについては、詳しくは、拙著『ホロコーストの力学ー独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法―』（青木書店、2003 年）を見ていただきたいのですが、一言でいえば、従来の研究は、ホロコーストをそれが起きている全体状況、すなわち、ドイツがソ連に攻め入って、しかも敗退していくという大きな変化の中で見ていないではないか、それでは、ホロコーストは訳が分からなくなる、という批判意識を、研究を始めたからり最初から持っていた、ということです。ユダヤ人が虐殺の問題は、ナチス全体の問題、ナチスの戦争政策・ナチスの東欧侵略戦争・その帰趨との関係で見るべきだと。

それで、私にとって大切だったのは、ドイツがソ連を攻撃した 1941 年から 42 年のことであり、その中でのドイツの敗退過程でした。その巨大な変化の中で、ユダヤ人殺戮が拡大していくのです。

大問題は、ヒトラー・ナチスドイツの世界強国への野望・ソ連東欧支配の基本政策と行動であり、その全体の問題の中に、マイノリティのユダヤ人を殺戮している重要な・あるいは決定的な要因群がある、という見方です。

そのような見方をしながら、ドイツが戦争をはじめ、ヨーロッパ支配を拡大していくプロセスを史料集によって検証し、オーストリア併合、チェコスロヴァキア解体、ポーランド侵略、フランス・ベルギー・オランダ侵略の過程で、ドイツ企業は何をしていたのかを調べていました。そうした論文を書きためて行ったころ、ソ連の崩壊という世界史的事件が起きました。世界を二分した巨大なソ連が、崩壊し、ばらばらの国家群になってしまう。この現実を見て、逆に、ソ連はなぜ、第二次大戦を経る中で、アメリカと並ぶ巨大国家になったのかを解明しなければならない、と思いました。

それを考えると、ヒトラー・ナチスドイツに 4 年間にわたって攻められながら、ものすごい苦難を乗り越え、ドイツを敗退させたという厳然たる事実に行き当たります。

ドイツが何をしたのか、それを解明する必要がある、ということで、拙著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆　1941‐1942』（同文舘、1994 年）をまとめました。この研究での史料はニュルンベルク裁判の史料であり、また刊行された資料集でした。それで、私の研究の実証的基礎を固めるために、ドイツで半年間文書館調査をする機会を得て、まとめたのが、拙著『独ソ戦とホロコースト』（日本経済評論社、2001 年）でした。

最初の本で、ホロコーストへの大きな転換点は、1941 年 12 月だとの確信がにじみ出る叙述になっていました。その点を、『歴史学研究』で書評してくださった栗原優氏（ドイツ現代史の代表的研究者で、特にワイマール末期・第三帝国の成立から第二次大戦への過程の研究で大著が 2 冊）から、「永岑は、12 月説のようだが、研究史を無視している」との批判をいただいたのでした。それで、これは本格的に検証を行わなけれあならないと、一連の論文を書き、まとめたのが、この注の初めに書いた拙著『ホロコーストの力学』です。

皆さんと、この間、ヴァンゼー会議の史料集を見てきました。その叙述の各所で、私の節、すなわち、ホロコーストの大転換点が、1941 年 12 月だということが書かれているのに、気づいたでしょうか？

まさに、私が、1994 年の本の中で主張した「12 月説」は、今では、欧米の定説になっている、と言ってもいいと考えています。